

一 次の問題に答えなさい。

問一 次の――のカタカナを漢字になおしなさい。

- ① 急に強い雨がフツてきた。
- ② 美しくモリつけられた料理をいただく。
- ③ 理科の授業でジシヤクを使った実験を行う。
- ④ かぎりあるシゲンを大切にしよう。

問二 () について、どのような言葉を入れるのが効果的ですか。前後の文をふまえ、() に入る語としてふさ

わしいものを選び、記号で答えなさい。

- ① 普通、人は(1)をつぶすことに心を用い、才能ある人が心を用いるのは、(1)を利用することである。(シヨ
ーペンハウアー)
- ② 人間であるということは(2)を持つことに他ならない。人間であることは自分の意思をそこにとらえながら、世界
の建設に参加していると感ずることである。(サン・テグジュペリ)
- ③ 一年中が、ただ遊ぶだけの休みだったら、遊ぶことは(3)と同様に退屈だろう。(シェイクスピア)

ア、自然 イ、時間 ウ、責任 エ、自分 オ、労働

二

生け花教室に通う主人公「津川紗英」は花を活けることに真剣に取り組みながらも、花や枝などを花器に美しく飾りつけることができず、自分の作品に満足することができていません。そんな中で、中学の同級生だった「朝倉くん」と生け花教室で再会します。次の文章を読み、後の問に答えなさい。

まだまだ、と思う。まだまだ、この花はほんとうの姿を見せていない。葉の向きを考え、茎を大きく切って剣山の上で角度を確かめる。花菖蒲のやわらかな紫がふつと霞む。花びらの向こう、ずっと前の列で一心に花を活けている朝倉くんの背中が目に入る。

朝倉くんが花を活けているとき、まわりの空気がぴんと張る。冷たいような、澄んだような空気の層ができて、そこに触れるのが畏れ多い感じがする。遠くから見つめているだけでじゅうぶんだと思う。

朝倉君は中学の同級生だった。勉強ができて、野球部では一塁手だった。友達も多そうだったし、女子にもわりと人気があったはずだ。この辺で一番の進学校に進んだことも知っている。でも、特に親しかったわけではなく、知っているのはそれくらいだった。野球部らしく丸刈りだった髪が伸びかけていた。野球は辞めたのかなと思った。

最初に見かけた時は驚きもしなかった。誰か、たとえばガールフレンドとか妹だとかの付き添いに来てるんだろうと思った。教室の後、花材を一式持ち帰るのがいつもけっこう大変だったからだ。

朝倉くん、と声をかけると、朝倉くんの方はちよつとびつくりしたみたいだった。久しぶり、と笑った顔は野草がほころぶときみたいな青さを漂わせた。

「誰を待ってるの？」

私は当たりを窺いながら訊いた。

「待ってないよ」

誰かを送ってきただけで待っているわけではないということだろうか。それ以上詮索するつもりはなかった。

だから、時間になっても朝倉くんが教室にいて、帰るところか用具を揃えはじめるのを見てようやく驚いた。男子が活け花を習いに来ること自体は珍しいことじゃない。この教室にも何人かは男の子がいるし、朝倉くんが活け花にふさわしくないということでもない。そうではなくて、どうして最初に見たときに気づかなかったのか、自分は朝倉くんを全然見ていなかったのか、ということを含さらながら知らされたのだ。朝倉くんは、クラスで勉強していた姿より、校庭でボールを追いかけていた姿より、ここで花を活けている背中がいちばん凛々しい。

視界の隅で朝倉くんが動くたびに、私も揺れた。朝倉くんは今、どの花を見て、どの花に触れているだろう、と思いながら手元の花を活ける。うまくはいかなかった。いつもと変わらず、思うようには活けられない。

教室が終わりに近づいて、生徒の作品を鑑賞しあう時間になると、私は前のほうへ移動し、朝倉くんの席に近づいて彼の花を覗いた。

美しかった。私はその花に釘付けになった。私だけではない。みんな朝倉くんの花を遠巻きにして息をひそめていた。思うように活けられない、と私がいつも思っている、その「思うように」をはるかに超えた花だった。私が思うことなんか、たかが知れている、と思った。

教室の帰りに朝倉くんを追った。花材と華道具かどうぐを籠かごに積んで自転車に跨またがろうとしているところに掛けていき、後ろから声をかけた。

「待って」

朝倉くんが振り返る。

「朝倉くんの花、すごくよかった」

はにかんだような目が、まぶしい。こんな表情もできる人だったんだ。

「いや、まだまだだよ」

日に焼けた顔でそういつて片手をあげると、朝倉くんは自転車で走っていつてしまった。

(中略)

活け花教室で次に朝倉くんと会った時に私は訊いた。

「まだまだ、って、どうしてわかるの」

え、と朝倉くんが顔を上げる。

「こないだ、まだまだだっていったよね。どうしてそう思うの。どうしてわかるの。どうしたらまだまだじゃなくなるの」
まだまだ届かない、思うようには活けられない。朝倉くんは自分の花をそう評した。

「ちょっと、紗英」

千尋が私の左肘をつついて止めようとしている。千尋は親切だから私が突っ走り気味になると上手に制御してくれる。この
活け花教室を紹介してくれたのも千尋だった。

「わかるときはわかるんじゃないかな」

真面目な声で朝倉くんはいった。それからちよつと笑った。

「謙遜だとは考えなかったんだね」

「え、謙遜だったの？」

私が驚くと、冗談だよ、という。

「花を活着てると気持ちがいいだろ。思った通りに活けられると、気持ちのよさが持続する。そのやり方をここに習いに来て
るんだ。みんなもそうなんじゃないの」

「なるほど」

私は感心して何度もうなずいた。

「気持ちのよさが持続する。なるほどね」

朝倉くんは、やめて、恥ずかしいから、といった。

「①なるほど。気持ちのよさを持続するために」

うなずきながらも一度私がいうと、朝倉くんはしつしつと追い払う真似をした。

思った通りに活ける、と朝倉くんは言っていたけれど、私の「思った通り」じゃだめなんだと思う。私なんかの思ったところを超えてあるのが花だ。そう朝倉くんの花が教えてくれる。

②じゃあ、なるべく何にも考えないようにして活けてみよう。

その考えは、しかし間違いだっらしい。

「津川さん、真面目におやりなさい」

先生は巡回^{じゅんかい}してきて私の花を見るなりそういった。

「しょうがないわねえ」

いつもなら、注意されることはあっても先生の目はあたたかい。しょうがないわねえ、と笑っている。でも、今日は違った。

基本形を逸脱^{いつだつ}したためちやくちやな花がよほど（A）に据え^すかねたらしく、剣山から私の花をぐさぐさ抜いた。

「どういうつもりなの」

声は怒り^{いか}を抑^{おさ}えている。周囲の目がこちらに集まっている。

「③いつもの津川さんじゃないわね。遊び半分で活けるのは、花を裏切ったことになるの」

すみません、と私は謝った。遊び半分なんかじゃなく、真剣に考えたらこうなったんだけど、普段^{ふだん}は穏やか^{おだ}な先生の剣幕^{けんまく}を見たらやっぱりそれはいえなかった。先生は花を全部抜くと大きくため息をついて、ふいに立ち去ってしまった。

千尋と目が合う。どんまい、と（B）だけで笑ってくれる。もう一度水切りをしておして、少し茎^{くき}の短くなってしまった花を見る。またいつもみたいに、習った型の通り順番に差していくんだろうか。型通りなら誰が活けても同じじゃないか。

私はこっそり辺りを見まわす。みんな、おとなしく従っているのはなぜなんだろう。――そんなふうに思うなんて不遜だし、傲慢だ。だけど急に、目の前の花が色褪せて見える。もしかしたら活け花はどうしても私がやらなきゃならないことじゃないのかもしれない。

このまま塾に行くという千尋と別れて帰ろうとしたら、市民センターの出口のところに朝倉くんがいた。自然にふたり並んで歩き出す。

「どうして私を待ってたの、とか訊かないか普通」

朝倉くんがいうので初めて気がついた。

「そっか、朝倉くん、あたしのこと待っててくれたんだ」

「……いいよなあ、さえこは」

さえこ。懐かしい呼び名だ。久しぶりに聞いた。さえこ、さえこ、と中学のクラスメイトは呼んだ。本当の名前は紗英なのに、そこになぜか子をつけて、紗英子、それが私の愛称だった。紗英、と呼び捨てにするほど親しくない同級生たちにとつて、子をつけるだけでフェイクになる。紗英子なら呼べる。そういうことらしい。彼らは私を呼びたかったのだ。さえこ、さえこ、と気軽に愛称で呼べて、さえこはいいよなあ、なんていえる存在が欲しかったんだと思う。事実、私は一日に何度も名前を呼ばれ、さえこ、さえこ、と手招きされる。さえこはいいね、さえこはいいよなあ。なにがいいのかよくわからないけど、みんなにそういわれるのがこそばゆくて、うふふ、と笑う。そうすると彼らはいよいよもって、いいよなあ、と繰り返す。

「さっきの、先生に注意されてた花、見たよ。びっくりした。あれ、遊んでたんじゃないよな、確信犯だよな」

うーん、と私は言葉を濁す。

「自分でもどうしたいんだかわらなくなっちゃった」

「それもわかった、あの花見たら」

朝倉くんはそういつて笑う。

「やりたいことはなんとなく伝わってきた。面白いと思ったよ。でも、何百年もかけて磨かれてきた技に立ち向かおうと思つたら、足場が必要だろ。いきなり自己流じゃ太刀打ちできない」

市民センターを出ると陽射しが強い。自転車置き場まで並んで歩く。

「あの先生は、正当に磨かれてきた技を継いできたひとだと俺は思ってる。（C）は少々固いけど、習う価値はあると思ふよ。ただどさえこがどう思ふかは、さえこ次第だ」

「あたしはべつに」

「べつに、やめようとは思ってない？」

「うん」

嘘をついた。やめてもいいかな、とちよつと思つていた。曲がりなりにも活けた花を、有無をいわず全部抜かれたらやっぱりめげる。

でも、朝倉くんが笑顔になった。

「そうか、よかった。せっかくなんだから、やめるなよ」

「ありがとう」

手を振って別れ、すぐに朝倉くんは反対方向へ走り出す。私は桜並木のほうへ自転車をゆっくり漕ぎ出しながら、朝倉くんの「せっかくなんだから」を考える。せっかく始めたんだから、やめるなよ。せっかく面白くなってきたんだから、やめるなよ。せっかく会えるんだから、やめるなよ。うん、これかな。私はいちばん自分に都合のいいフレーズを選んで口の中で繰り返す。せっかく会えるんだから、やめるなよ。④うふふ、と笑みがこぼれる。

（宮下奈都「つぼみ」）

問一 (A) (C) に入る語としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、目 イ、頭 ウ、足 エ、腹

問二 ――①について、「私」はなぜ二度も同じ言葉をつぶやいているのですか。その理由としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、朝倉くんがあまりにも立派なことをいうので、茶化してやろうと考えたから。

イ、朝倉くんの考えに共感し、しみじみと感じ入ってしまったから。

ウ、朝倉くんの言葉の意味が理解できず、よくわからなかったから。

エ、朝倉くんが自分の考えと似ていたので、うれしくなってしまったから。

問三 ――②について、「私」はなぜそのように考えたのですか。その理由としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、自分を邪険じゃけんにあつかった朝倉くんに対して不満を感じているから。

イ、あこがれている朝倉くんのアドバイスを信じてみようと思ったから。

ウ、生け花にあきてしまって投げやりな気持ちになっているから。

エ、自分がどれだけ頭をひねっても理想通りの活け方はできそうにないから。

問四 ――③について、先生はいつもの「私」をどのような生徒だと考えていましたか。次の中からふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、とても不真面目で指導にしっかりと従わない困った生徒。

イ、技量は足りないけれどきちんと花と向かい合うことできる生徒。

ウ、自分の思い通りに花が活けられないことでやる気を失っている生徒。

エ、才能はあるのにその日の気分が生け方に現れる気持ちにムラがある生徒。

問五 中学時代をふりかえって、クラスメイトから自分はどのように見られていたと「私」は思っていますか。その説明としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、なにも悩みがなさそうであらやましく思われている存在。

イ、いつも周囲に笑顔を振りまいている愛嬌あいきょうのある存在。

ウ、誰とでも仲良くなることができる親しみやすい存在。

エ、色々なことを相談できる頼りがいのある存在。

問六 ――④について、朝倉さんと別れた後、主人公は朝倉さんに対してどのような思いを抱いて（いだ）いますか。ふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、自分のことを心配して待っていてくれた朝倉さんに対して心から感謝している。

イ、朝倉さんの花を活ける技術に感服し、自分も朝倉さんのようになりたいと思っている。

ウ、活け花への姿勢だけでなく、朝倉さんの人柄（ひとがら）に好意やあこがれを抱き（いだ）始めている。

エ、朝倉さんが自分に対して好意を持っていることに気づき、喜びを感じている。

問七 朝倉さんの「活け花に対する姿勢」はどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、自分が習得した「美しく花を活ける技」に強い自信をもち、それを周囲に見せつけながら花を活けている。

イ、「花が美しく活けられた姿」を思い描く才能（えが）に秀（ひい）で、頭で考えなくとも無意識に花を活けることができる。

ウ、「花の本当の美しさ」を引き出すことを心から楽しみながらも、真剣に集中して活け花に臨んでいる。

エ、何事もそつなくこなす器用さを身につけているため、「花を活ける技術」よりも自分の感性を重視している。

問八 この主人公は、花の美しさや人の姿勢などに敏感（びんかん）で、何かを感じ取ることができる感性の豊かな人物です。本文中よりそれがうかがえるところをまとめ、解答欄（かいとうらん）に合うように答えなさい。

三

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

学校で教えられる知識（学校知）が何の役に立つのか、わからない子どもはたくさんいますね。それどころか、いろんな教科を教えている先生自身が、その教科の知識を学ばせることが子どもたちにとってどんな意味があるのかを、考えたこともなかったりしませんか。学校で学ぶ知識の意義がわからなくなると、「学校知よりも経験だ!」という教育論が登場してきます。

「学校での勉強よりも、世の中に出て経験から学べばいい」と口にする大人も少なくありません。

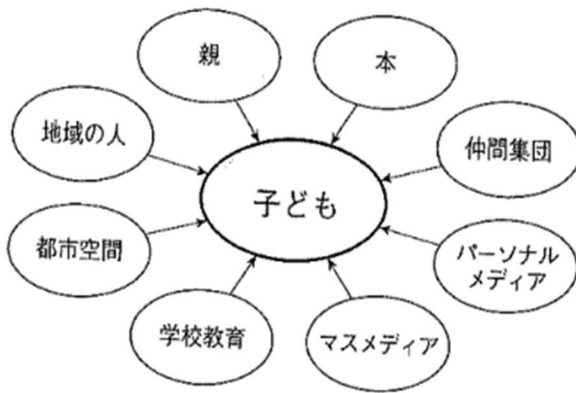


図 多様な社会化エージェント

学校で学ぶものよりは経験が重要だという経験重視の教育論は、社会全体に根強くあります。そこにはいろいろなバリエーションがあります。「学校で学ぶ知識は世間で使えない（使わない）」とか、「学校で教えている教師は世間知らずで、子どもたちに無意味なことをやらせている」とか。「学歴競争は役に立たないことを学ばせて、単に知的な優位を競って、勝者と敗者をつくるだけのゲームだ」など。さらに、「仕事に必要なものは会社に入ってから学ぶから、学校の勉強はどうでもよい」、「身の回りの人からいろんなことを学べば十分だ。別に学校で教わる必要はない」と、さまざまな言い方が存在します。

この章では、①こういうタイプの教育論をどう考えるかというお話をします。

②「学校知よりも経験」という議論には、一定の根拠があります。子どもたちは、学校教育以外の場で多くのことを学んでいくからです。第1章の図を思い出してみてください。

子どもの身の回りには、たくさんの種類の社会化エージェントが存在します。学校というのは、子どもの社会化を促す（うなが）さんのものの中の一つにすぎませんでしたよね。

考えてみれば、大人も同じです。大人もまた、たくさんの種類の社会化エージェントに囲まれ、いろいろなことを学びながら人生をやっていきます。もちろん、本を読んだり、ウェブで調べものをしたりすることはできますが、それらとは別に、大人も普段のさまざまな経験から学び続けています。

特に重要なのは、「仕事から学ぶ」です。人は仕事に携わりながら、同時にいろいろなことを学びます。社内研修とか実地研修のような、「これを調べ」と用意されたものを学習させられることもあります。しかし、それだけではありません。手がけている作業の中身それ自体から何かを学んだり、一緒に働いている上司や先輩の様子を見ながら学ぶというのもあります。上司や先輩がわざわざアドバイスや指導をしてくれることもあります。

仕事以外の場面でも、生活をしながらその中で学ぶ、ということとはたくさんあります。たとえば、役所に行って何かの手続きをするとか、近所の人と話することといったことが、それ自体、新たな学習の機会になります。

「経験から学ぶ」というとき、仕事であれ生活であれ、「失敗から学ぶ」というのが、とても重要です。物事がうまくいっているときには、新しい学習は起きにくいのですが、何か失敗すると、「どうすればよかったんだ？」と考える機会になるからです。私の学生には、「若い頃は、失敗して恥をかきながらいろんなことを覚えていきなさい」と言うようにしています。若い人はどうしても失敗を恐れる（おそ）気持ちばかりが強いです。みなさんどうか、たくさん失敗してください。

ただし、失敗してもそれをしっかり反省しないと、学習の機会になりません。③私は学生たちに、「同じことで三度失敗す

るな」と言うようにしています。失敗にはたくさんの条件や要因が関わっていますから、一度の失敗を多面的に振り返ることが必要ですが、それは容易ではありません。でも、また同じ失敗をしたら、反省すべきポイントが明確になります。「あ、前と同じ失敗をしちゃった」と気がついたときに、その共通の失敗の性格や原因を探してくれればいい、と思うようにしています。

ともあれ、仕事をしながら新しいことを学んだり、周囲から学んだり、失敗から学んだりして経験を重ねていく中で、人は、いつのまにかいろんなことをたくさん学んでいるものなのです。

だから、「経験から学ぶ」というのが、それなりに人生をやっていく上で、とても重要だというのは本当です。「学校知よりも経験」という主張する人の議論には一理あります。

しかし、だからといって、「学校の勉強は要らない」かどうかは、別問題です。「Bは重要だ」という命題（主張）がもしも正しいとしても、それによって、「AよりもBの方が重要だ」とか、「Aは不要だ」という結論が導かれるわけではありません。

私がこれからお話したいのは、学校で教えられる知は、子どもの日常生活を超えた知だからこそ重要だということです。ただしそうであるがゆえに、その内容は子どもにとってなじみにくいものだ、ということも説明します。

ここでは、ドイツの教育哲学者のK・モレンハウアーてつがくしやが書いた『忘れられた連関』いまいやすお（今井康雄訳、みずず書房しよぼう）の議論を紹介します。モレンハウアーは、議論の材料として、『世界図絵』（一六五八年）という世界初の子ども向けの絵入り教科書を作ったJ・A・コメニウスについての考察を通して、学校の知の特異性を説明します。

モンハウアーが考察に使うのが、「提示」・「代表的（代理的）提示」という概念がいねんです。「提示」（Präsentation）とは、学校がなか

った社会における人間形成のやり方です。第一次的な生活世界、すなわち普段の生活の中で、周囲の大人と一緒に生活することとそれ自体の中で、子どもたちはさまざまなことを学んでいました。羊飼いの子であれ、農民の子であれ、大人と一緒に暮らし、家業を手伝ったり、雑談の輪に入ったりする中で、いろいろなことを覚えます。生活それ自体が学習の過程なのです。人間の長い歴史のほとんどは、これで何とかなってきました。④「羊飼いの子は羊飼いになる」「農民の子は農民になる」というふうな伝統的な社会では、生活即学習そくという「提示」という形式で、人は一人前の大人になれていたわけです。

しかし、社会が発展して複雑になり、子どもたちが親とは異なる生き方をするようになっていくと、「提示」だけでは不十分になっていきます。モレンハウアーの言葉を借りると、「社会的生活が複雑化するにつれて、子どもを待ちかまえている実生活の諸関係は、そのどれをとっても子どもにとって近寄り難いものとなる。将来必要となるものが子どもの第一次的な生活世界に含まれる度合いはますます低くなるわけである」。

たとえば、契約けいやくをするとか、遠くの世界とコミュニケーションするとか、どこか外で作ったルールが持ち込まれるというようなことがどんどん起きてくる。耳慣れない単語で示された新奇しんきなものを理解しないと、外の世界で仕事にありつくことができなくなる。そうになると、日常の身近な関係だけの学習では対応しきれません。「この結果、おとなが自らの生活を生きて見せる『提示』とは別に、社会的・歴史的文化のうち、経験によっては子どもが到達とうたつし難い部分を何らかの仕方で彼らに知らせてやるという課題が生じる」。モレンハウアーが指摘してきする、この「経験によっては子どもが到達し難い部分」というのがポイントです。つまり、身の回りにないものを学ばせる必要が生じてきたのだ、という話です。

そこで、学校の重要性が出てきます。学校は、この世界がどうなっているかということ、言葉や記号を使って子どもたち

に学ばせる役割を果たすというのです。ここが重要なポイントです。

⑤子どもたちは学校に通って、そこで、「カリキュラム化された知」を学びます。その「カリキュラム化された知」というのは、この世界を再構成して縮約（縮尺）したものです。モレンハウアーは、学校のカリキュラム化された知を通じた学習の形式を、「代表的提示（代理的提示）」（Representation）と呼んでいます。モレンハウアーの本の訳者である今井康雄さんの解説を引用しておきます。「そこでは子どもたちは、学校のような実生活から区別された空間のなかで、言語的・記号的に組織された知識を学ぶことになる。……子どもたちは、知の世界を通して現実世界とは何であるかを知り、こうして現実世界への参入が準備されることになる」（今井二〇〇九）。

生まれ育った身の回りの世界を超えて、広い世界で生きていくためには、子どもたちは、言葉や記号を通して、この世界がどういうものなのかを理解しないといけない。学校で教えられるのはそういう知なのです。だから、学校知は、いわば記号化された「世界の縮図」だといえるのです。

（中略）

今、子どもたちが学校であたりまえのように学んでいる国語は、日常生活であまり使わない言葉も含めて、私たちが言葉を使いこなせるようになるためのものです。算数や数学は、世界を数量的に理解する、あるいは図形的に理解するときの道具です。地理は、今生きている世界をもっと広げて知ることになるし、歴史は、時間軸で過去にさかのぼって、私たちを知ることになります。

物理や化学は、物がどういうふう運動したり、どういうふう質が変わっていったりするのか、そこには原理と法則があ

って、それに沿って物が変わっていることを理解します。外国語は、世界の人たちとのコミュニケーションだし、音楽、美術、体育は、人間がつくり出した文化をコンパクトに縮約して、それぞれの領域の知識やスキルを身につけるものです。

つまり、学校で教えられているカリキュラムは、「この世界が何なのか」について縮約・再構成された知識や文化であり、あるいは、それをベースにした技能の習得のようなものです。ですから、日常の生活世界での経験では学べないものが、「カリキュラム化された知」として学校で学べます。そこでは、親や友だちからは学べないような種類の知を学ぶことができます。重要なことは、それによって、子どもたちはより広い世界に出ていくことが可能になるということです。

（広田照幸 「学校はなぜ退屈たいくつでなぜ大切なのか」）

問一 ――①「こういうタイプの教育論」をあらわした慣用句としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア、三人寄れば文殊の知恵 もんじゅ ちえ

イ、下手の横好き

ウ、習うより慣れよ

エ、好きこそものの上手なれ

問二 ――②について、「社会化」とは「人が外にある何かを自分の知識や感じ方として学ぶこと」で、学校で行われる教育
よりも広い意味での学びのことを指し、子どもの周囲にいる(ある)さまざまな人や物が学習のきっかけを「社会化エ
ージェント」と言います。これまで学校以外の場合あなたが「社会化エージェント」から「学んだこと」はどんなことが
ありますか。解答欄にあわせて、具体的に書きなさい。

社会化エージェント

学んだこと

(①) から (②) を学んだ。

問三 ――③について、筆者が二度の失敗まではしてもかまわないと考えている理由を次のようにまとめました。空欄部分
に五〇字の語を考えて入れ、説明を完成させなさい。

一度の失敗では (①) () を理解することが難しいが、二度失敗したらそれを特定することが容易になる。

もし三度同じ失敗をするということは (②) () ができていないので、筆者は「同じことで三度失敗するな」
と言っている。

問四 ――④について、「伝統的な社会では、生活即学習という「提示」という形式で、人は一人前の大人になっていた」と

ありますが、なぜそのようなことが可能だったのでしょうか。その理由としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、伝統的な社会では学習よりも労働の方が尊いとされていたので、そこまで学校で学習することをもとめられなかったから。

イ、伝統的な社会では家族以外の仲間と仕事をするが多かったので、学習よりもコミュニケーション能力が重視されたから。

ウ、伝統的な社会ではお互いの信頼関係にもとづく約束が重視されたので、法律や契約などについて学ぶ必要がなかったから。

エ、伝統的な社会では家業を親から受け継ぐことが一般的だったので、家業に関する知識や技能を学ぶことで十分とされていたから。

問五 ――⑤について、「カリキュラム化された知」を学ぶのはなぜですか。その説明としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、先生や友達との接し方を学ぶことで、社会に出た時のふるまい方を学ぶため。

イ、普段の生活では学べない知を得て、社会の中で活躍する可能性を広げるため。

ウ、生活の中で役に立つ知識を学ぶことで、普段の生活を快適にするため。

エ、専門的な技術を学ぶことで、家でやっている仕事を受け継ぎやすくするため。

問六 本文で筆者が言っていることとして正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア、学校での勉強よりも経験が大切なので、たくさんの経験を積むことが子どもの成長には必要だ。

イ、挑戦と成功を積み重ねることが重要なので、それぞれにあったレベルの問題に取り組ませるのが大切だ。

ウ、学校で学ぶ内容は、身近な人から教わることや日常生活で自ら発見したことの延長線上にある。

エ、子どもは学校だけでなく周囲の人からの影響で成長するので、学校だけが学ぶ場だとはいえない。

問七

この本のタイトルは「学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか」ですが、ここまでの文章を読み、「学校の勉強が退屈」な理由と「学校の勉強が大切」な理由をそれぞれ説明しなさい。

三							二									一													
問七				問六	問五	問四	問三	問二	問一	問八		問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問二	問一									
	「学校の勉強が大切」な理由		「学校の勉強が退屈」な理由				①	①		を感じ取っているところ。								A	①	①									
							②	②																					

受験番号		座席番号		名前	
------	--	------	--	----	--

2025年度	入学 考 査 問 題	国語・解答用紙	聖 学 院 中 学 校
--------	------------------------	---------	----------------------------